モンテーニュの『自然神学』翻訳における「見ること」について

—voir を中心に—

奥　村　真理子

序

『エセー』では「見ること」が作品の定義と方法論に密接に関わっている。モンテーニュは『エセー』を自画像として読者に提示し，自分のありのままの姿を読者に見てほしいと繰返し告げる。「私の飾りのない，自然な，普段のありようを見てほしい。私が描くのは私なのだから。[…]もしも私が，原始の自然法の穏やかな自由のもとで未だ暮らしていると言われるあの民族の中にいたなら，間違いなく喜んで素っ裸の自分を丸ごと描いたことだろう。だから，読者よ，私自身が私の本の主題なのだ」(*E.*,「読者へ」，頁番号なし/p. 3)。[1] 無論，自画像を描くには自分を見なければならない。「本当に，それ[私の欠陥を非難すること] もまた，私が何よりも判断力を働かせる主題なのだ。人々はいつも外を見ているが，私はと言えば，視線を内に向け，打ち込み，そこに引き留める。誰もが自分の前方を見ている。私は，私の内を見る」(*E.*, II, 17, p. 467/pp. 657-658)。見るには視力が必要だが，「判断の試し (の数々)」essai(s) について語るとき，モンテーニュは判断力を「視力」と呼ぶ。「私はあらゆる事について率直に私見を述べる […] それらについて述べることは，物事の大きさや程度を確定するためでもなく，私の視力がどこまで届き，どれだけ見えるか «la mesure & force de ma veüe» を知らせるためなのだ」(*E.*, II, 10, pp. 102-103/p. 410)。[2] 記される判断の数々は彼の「視力」の提示なのである。『エセー』では，著者自身が判断力 (「視力」) を試す (「見る」) 自分を「見る」。その記録が，「見る」主体であると同時に客体である彼自身の「自画像」となる。それを読者に「見て」ほしいのである。

このような「見ること」の，特に「自己を見る」という意識が，『エセー』を書き始める前のモンテーニュにあったのだろうか。それを，彼の『自然神学』翻訳と原文を読み比べることによって探りたい，これが本研究の目的である。この翻訳が出版された1569年が，将来『エセー』となる文章を彼が書き始めたと推定される1572年以前で，それに近い時期だからである。また，16世紀の翻訳は現代よりも翻訳者の自由の範囲が広く，翻訳者モンテーニュに関しても Coppin が強調した忠実度を Hendrick が修正したように，自由の度合いはかなり強く，場所によっては imitatio や inventio の域に達するほど[3]

なので，彼自身の意識を探る手掛りになり得ると考えるからである。さらに，スボンの『自然神学』には自己認識と「見ること」に看過できない機能が認められるからである。

Theologia naturalis における「見ること」

スボンが序論で述べている『自然神学』の目的は，人間が，人間としての本来の自己と神を認識し，それによって神と他の被造物に対する義務を認識し，進んでそれを果すよう駆り立てられ，自己の現状と，救いと永遠の生に必要な事柄とを認識し，カトリック信仰を固めることである。これに従って『自然神学』は次のように展開される。(1)第1-222章：神が人間に与えた第一の書である「自然（被造物）の書」に記された「自然の階梯」によって，人間に，神の似姿という本来の人間としての自己認識をさせ，神の恩義に報いる義務を認識させる証明。(2)第223-321章：人間の現状が本来の姿からいかに隔たっているか，いかにしてそうなったかを，神の第二の書，「聖書」に記された人間の原罪，堕落，イエスの神性と救済の理解によって認識させ，贖罪の義務を認識させる証明（223-280）。堕落の状態から本来の状態へ再び上るための階梯である七秘蹟の意義を認識させる証明（281-321）。(3)第322-330章：最後の審判と復活を認識させる証明。[4] 要するに全篇が，カトリック教義が真理であることを証明し，その認識を読者に働きかけるのである «per istam scientiam tota fides catholica infallibiliter cognoscitur et probatur esse verra.» (S., p. 16)。[5]

スボンは序論で，この書によって認識が「難儀なく」«sine difficultate et labore»「具体的に」«realiter» なされると繰返す（*ibid.*）。そのために彼が用いる方法は，学問に依拠せず «Ista scientia nulla alia indiget scientia neque arte» (S., p. 17)，誰もが経験で知っている明白な事柄によって証明すること «arguit per illa quae sunt certissima cuilibet homini per experientiam»（*ibid.*）である。そのようなスボンの認識論・証明法において，「視覚」の観念は「階梯」の観念とともに不可欠である。彼の「視覚」による認識の対象には数多くの段階がある。彼の論は，それらのより下位にある「見え（てい）るもの «quod videmus», «quod videtur», «visibile», etc.：周知・既知のもの，経験，身体的なもの，他の被造物・自然の階梯」を介して，より上位の「見え（てい）ないもの «quod non videmus», «quod non videtur», «invisibile», etc.：未知のもの，精神的（霊的）なもの，神」を「見る «videre»」のである。また，「目・視力」，「盲目」，「光」や「鏡」の比喩も多く，それらに伴うものとしても，さらには論の開始やまとめを示す論述用語としても，しばしば videre が用いられる。つまりスボンの証明は，下位の「見え（てい）るもの」を「見る」ことで上位の「見え（てい）ないもの」を「見る」ことを繰返す，「視覚」による「階梯」の昇降運動によって，カトリック教義の真理を認

識する（見る）よう読者を導くのである。スポンのこのような「視覚」的要素をモンテーニュはどのように読取り，どのように翻訳したのか。

Théologie naturelle における「見ること」

ラテン語の videre に最も一般的に相当するフランス語は voir である。実際，翻訳 *Théologie naturelle* を読むと，「視覚」に関わる語の中で voir が最も多く使われているように思われる。そこで，CD-ROM *Le Corpus Montaigne* で videre と voir の各語形を検索しヒット件数を合計した結果，*Theologia* では videre が480回，*Théologie* では voir が390回で(献辞，註，索引は除く。以下同じ)，480のおよそ8割である。これは原文と翻訳の分量の比率にほぼ比例する。モンテーニュの『自然神学』翻訳は，Coppin や Hendrick も述べているとおり，[6] 原文の冗長さ・くどさ・単調さを緩和し，簡潔さと変化を心掛けているからである。たしかに videre の訳にもこの傾向がある。ところが両者の該当箇所を対照すると，480の videre のうち135（28%）が voir に訳され，345（72%）が voir に訳されていない。また390の voir のうち255（65%）が videre の訳ではない。しかも章によってこれらの割合は著しく異なる。文体的配慮だけでは説明がつかないのである。統計数値は一つの指標になるが，それだけでは不十分のようだ。また，少数の例に意味がないとは限らず，むしろ例外的だからこそ大きな意味をもつ場合もある。各々の箇所を内容と照らし合わせて個別に検討しなければならない。

1．論述用語

論述用語の videre は様々な語に言い換えられる場合の方が多い。[7] しかし，逆に，videre がないのに翻訳で voir が用いられている箇所が若干あり，注目に値する。たとえば，第1章で「自然の階梯」を概観した後，第2章で，人間が自己と神を認識するために人間と他の被造物との比較を始めることを告げる次の文章の訳がそうだ。

> [S] et hoc secundum convenientiam et differentiam scilicet in quo convenit homo in aliis rebus inferioribus et in quo differt ab eis. Et in ista comparatione cognoscet seipsum. et hoc quod est supra ipsum scilicet deum et suum conditorem. Consideret ergo homo primo convenientiam quam habet cum aliis rebus. (p. 24) ⇒ [M] pour *veoir* en quoy il est accordant, ou en quoy il differe des choses qui sont au dessous de luy. Par cette comparaison l'homme parviendra à la cognoissance de soy & de Dieu son createur qui est au dessus. *Voyon* doncq' premierement en general, & puis en particulier, en quoy il se rapporte aux

autres choses. (f°s 8 v^{o-} 9 r°)

原文には videre がないのに，翻訳は2度 voir を用いている。この同語反復は，本来の自己が「見えていない」人間に人間としての自己認識をさせるために他の被造物を「見る」というスボンが前章で述べた趣旨を活かしている。ここでモンテーニュは「見る」という観念が内容的に必要であると判断し，voir を使っているのではないか。彼はスボンの認識論・証明法をどのように受容したのか。

2．認識論・証明法：全般的傾向

モンテーニュは，原文で視覚の観念を含む語が使用されていないところでも，voir や «à l'œil» を用いて訳している。その最も顕著な例は，スボンが序論で認識の容易さと具体性を約束している箇所の訳文である。原文 «ista scientia docet omnem hominem *cognoscere realiter* sine difficultate et labore omnem veritatem homini necessariam tam de homine quam de Deo.» (S., p. 16) は，«ceste doctrine aprend à tout homme de *veoir à l'œil* sans difficulté & sans peine la verité, autant qu'il est possible à la raison naturelle, pour la cognoissance de Dieu & de soy-mesmes,» (M., f° 1 v°) となっている。ここはスボンが強調する理性の確実性をモンテーニュが緩和していることで有名な箇所だが，他方「具体的に認識する」を「明白に見る」と訳し，認識の具体性を「視覚」的に翻訳しているのである。また，«nous voyons» の使い方にも翻訳者自身の判断が大いに働いている。«nous voyons» の使用総数は，直説法半過去1回および接続法現在2回を含め90回だが，そのうち，①videre の訳語である箇所は38(42%)，②videre 以外の訳語である場合が19 (21%)，③相当語句がない場合が33 (37%) で，②と③を合わせるとおよそ6割を占める。①のうち3例が論述用語で，35例が認識論・証明法に属する。②の場合，2例が論述用語で，17例が認識論・証明法に属し，すべて，「見え（てい）るもの」などを論拠として提示している。③は，結論を示す2例以外，すべて論拠の提示である。そのうち25例は「見え（てい）るものなど」を論拠として提示しているのである。モンテーニュは，「誰でも容易にわかる事柄」によって証明し，「難儀なく具体的に認識」させるというスボンの方針を尊重するのみならず，彼の認識論・証明法における「視覚」的要素を自らの判断で活用したと言えよう。

これは『エセー』においてモンテーニュが標榜する，学説や理論よりも事例によって論じる方針と共通している。しかもモンテーニュは事例を頻繁に «nous voyons» で導入している。また，「レーモン・スボン弁護」の中で，スボンの信仰心とともに彼の「人間的な，自然な論拠」«raisons humaines & naturelles» による証明法を高く評価している

«ie le trouue si ferme & si heureus, que ie ne pense point quil soit possible de mieux faire en cest argument la, & croy que nul ne l'a esgalé.» (*E.*, II, 12, p. 154/p. 440)。そしてあの膨大な章の9割以上が，スボンの議論が「弱く不適切」だという非難(*E.*, p. 166/p. 448) に対する「弁護」になる（もっともそれは，周知のとおり，結局スボンにも切りつけてしまう「諸刃の剣」になるのだが)。たしかに『自然神学』は卑近な事柄を援用しており，著者自身が自覚して釘を刺しているように，人によっては「馬鹿にする」«vilipendit» (S., p. 17) かもしれない。だがモンテーニュはそのような方法に共感したのである。傲慢な学問至上主義よりも評価し，自らも実践したのである。彼の翻訳がそれを如実に物語っている。

3．神の認識：「神を見る」

認識を表わす videre が cognoscere などの，より明確に認識を表す他の語と並べられている場合，モンテーニュは videre の訳を省いて connaître などに訳すことが多い。[8] そのような中で，第154章「肉体の生の後，神の愛から生ずる喜びについて，および喜びと愛の完全から魂がその創造者たる神を直接，媒介なしに，はっきりと見ることが明らかにされること」には意味深い例外が認められる。ここでは原文は videre が10回である。翻訳は voir が6回だが，名詞 vue を用いて訳された箇所1を加えれば計7になる。厳密に言えば細かな異同はあるが，全体的に言えば，「見る」が3回減ったのは，簡潔化(章のタイトルの後半および本文中の繰返しの省略)という文体的配慮のみに由来している。つまりモンテーニュは，死後の魂が神を「見る」という表現に込められたスボンの趣旨を読取り，それに従っているのである。特に次の箇所が注目に値する。まず，「魂が完全に認識し見なければならない」«et oportet ut perfectissime cognoscat et *videat*» (S., p. 184) が，「完全な神の認識が魂にできなければならない，それは魂において見ることによってしか得られない」«il luy faut fournir de sa parfaicte cognoissance, qui ne se peut acquerir en elle que par la veuë» (M., f° 162 v°) と，videre が名詞 vue で訳される。そしてこのすぐ後の «omnia clare *videbit et cognoscet* deum creatorem suum summe bonum. summe benignum. summe suavem et delectabilem» (S., *ibid.*) が，«qu'elle *verra* toutes choses à clair, qu'elle *verra* la grandeur de son createur tout bon, tout bening & tout aymable.» (M., *ibid.*) と訳され，cognoscere の訳の方が省かれ，voir が2度繰り返されるのである。「視覚」の観念が浮き彫りになっている。モンテーニュはこの章における「視覚」の重要性を考慮し，前面に打ち出したのだろう。

これと対照的なのが，現世での人間による神の認識を，月の光によって太陽の光を見ることに譬えた第24章である。ここでモンテーニュは8回もの videre の訳に一度も voir

を使わない。[9] だが，この章のキーワードである「目」oculus,「光」lumen,「鏡」speculum,「影」umbra は忠実に訳し，決して視覚の比喩を損なってはいない。だからこそ，明らかに voir の使用を避けていると考えざるを得ない。これはモンテーニュの『自然神学』翻訳において，voir が「具体的に，容易に，明白に見る」という概念をもつことが原因であると思われる。現世で人間が神の esse（être）を認識するのは，直接見られない太陽を月の弱い光によって見るように，被造物を介して想念によって思い描くことにすぎず，経験や卑近な事物を見ることとはまったく異なるという違いを，ここにおけるモンテーニュの訳は明確に表している。「われわれの内的な目は現世では，いと高き光り輝く永久の神の本質を，視力を損なうことなく直接見ることはできない」«Ita oculi nostri interiores non possunt per se *videre* de directo ipsum esse dei aeternum luminosum et excellentissimum in hoc mundo sine destructione oculorum.»（S., p. 47）という，第154章で述べることになる「肉体の死後，魂が直接神を見ること」を先取りした文の訳でさえ，モンテーニュは，«ainsi empesches par la tendresse des yeux de nos entendemens, de pouvoir pendant que nous sommes ça bas, *contempler* vis à vis, & de droit fil l'esclairante & lumineuse grandeur de l'estre de Dieu,»（M., f° 28 v°）と，voir ではなく contempler を用いて，「内的な魂の目によって見ること」すなわち「観想」を原文よりも強調している。モンテーニュは『エセー』の中で，判断のテーマと「見ること」を結び付けて，その重要性を繰返し強調しているのに，「天命を判断するのは慎ましくせねばならないこと」（I, 32, «Qu'il faut sobrement se mesler de *juger* des ordonnances divines.»）では，神意の解釈をしたがる人々は太陽を直視しようとして失明しても驚いてはいけないと，例外的に警告している。この借用の直接の出典はプルタルコスの「詮索好きについて」だが，それは「詮索好き」という意味を込めてのことだろう。[10] そのような神意の解釈に関する考えも比喩も，既にここに見出されるのではないだろうか。

4．自己認識：「自己を見る」

自己認識論が重要な役割を担う第194章「神の御業によって得られる神の認識には多くの段階があり，また神の名にも多くの段階があること」の訳文は，翻訳全体の中でも際立っている箇所の一つである。[11] これは訳語 voir についても言える。この章で展開される論が翻訳者モンテーニュにそうさせたのだろう。スボンの細かい議論を辿る代わりに要約すれば，それは，認識の主体が認識の根拠から近いか遠いか，自分の経験によるか否かによって認識の程度は序列化され，自己認識の中でも，「一個の人間が自己の内にある魂に自分の経験によって見る」ことが最高であり，こうして得る神の御業の認識に神

の認識も比例するという論である。さて，この究極の認識法から神の観念を取り除けば，まさにモンテーニュが『エセー』で試みている自己認識の方法にならないだろうか。たしかに，ここにおける人間の自己認識は，神によって創られ，あらゆる被造物の中で最も神の恩義を受けていることを自分の中に見出す認識であり，それに報いるために第一に神を愛し，神の栄誉を追求せねばならないという結論を導くためのものだ。したがって『エセー』における自己を「見ること」とは著しく異なる。しかし，彼の認識論への理解と共感が訳語 voir に表れている。スボンはここで videre を12回使っている。これは全330章の中で3番目に多い。モンテーニュの voir も同じく12回で，翻訳の中では2番目に多い。しかも12の videre のうち半数は voir 以外の語に訳したり省いたりし，逆に原文に videre のない所で6回 voir を使用している。さらに，神についての認識と，人間が経験によって得る認識の訳し方が対照的である。「神についてますます大いに認識し見る」«magis *cognoscit* et magis *videt* de deo» (S., p. 239) は，«*apprendra* plus sans comparaison de la nature & grandeur de son createur» と，voir を用いてない (M., f° 215 r°)。これは先程の第24章の場合と同じ理由と考えてよい。これに対し人間が他者及び自己に「見る」ことを表わす videre には，次のように voir を繰返し使っているのである。[＝は videre が voir に訳されたこと，－は videre が voir で訳されなかったこと，＋は videre のない所が voir を用いて訳されたことを示す。その左右の数字は，左がこの章における videre の番号，右が voir の番号。]

Ⓢ Et ista notitia acquisita de deo per cognitionem hominis. inquantum est opus dei potest esse major vel minor. secundum quod homo magis vel minus *cognoscit et videt seipsum*[2=2]. [...] Item quaedam sunt opera dei. quae omnis homo potest *videre*[3−] per experientiam. et alia sunt quae non *videt*[4−] nisi per testimonium aliorum qui dixerunt et *viderunt*[5=3] Et certius et magis cognoscit homo deum per opera quae *videt*[6−] *et percipit* per experientiam quam per opera quae cognoscit per testimonium aliorum.

Ⓜ Et ceste science acquise par la cognoissance de l'homme comme ouvrage de Dieu est plus ou moins parfaicte, selon que plus ou moins *il se cognoist & se voit*.[2=2] En outre il y a quelques operations de Dieu qui nous sont *monstrees & descouvertes*[3−] par l'experience, il y en a d'autres que nous n'*aprenons*[4−] que par le tesmoignage de ceux qui l'ont dict, & qui l'*ont veu*[5=3]. La cognoissance que nous tirons par ce que l'experience nous a *monstré*,[6−] est bien plus certaine que celle que nous tirons de

Item quia nihil magis cognoscit homo quam illud quod *sentit et videt*[7=4] per experientiam. ideo notitia generata de deo per opera dei quae homo *videt*[8=5] per experientiam. tenet ultimum gradum cognitionis per opera sua. Et iste habet duos gradus. quia aliquando homo *videt*[9=6] per experientiam opera quae deus operatur circa alium hominem. vel circa aliam rem extra se. aliquando *videt*[10=7] *et sentit* per experientiam opera quae deus operatur circa seipsum singulariter Et iste est ultimus gradus cognitionis per experientiam. et iste est certissimus. solidissimus. et firmissimus qui semper manet. et ibi est complementum cognitionis. Unde ista notitia non potest esse nisi in uno homine. nec potest alicui communicari. quia nullus homo potest totaliter *percipere nec sentire*[+8] illa quae fiunt circa seipsum. sicut ipsemet homo. Potest enim quilibet homo cognoscere per experientiam opera quae fiunt circa alios extra se. sed non sentire sicut illa quae fiunt circa seipsum. sed magis cognoscit quae fiunt circa seipsum quam circa alios immo nullus alius potest sentire illa quae fiunt circa seipsum nisi ipse solus (pp. 239-240.)

ce que nous avons ouy dire. Et veu que nous ne sçavons rien si bien que ce que nous *sentons & voions*,[7=4] la notice de Dieu establie en nous, par ce que nous *voyons*[8=5] *& sentons* est au dernier poinct d'asseurance & de certitude. Ce dernier degré de la cognoissance de Dieu par ses oeuvres se devise en deux considerations. Quelque fois nous *voyons*[9=6] par experience ce que Dieu oeuvre autour des autres hommes, ou de quelque autre chose hors de nous : Quelques fois nous *voyons*[10=7] *& sentons* ce qu'il ouvre particulierement en nous-mesmes : & ce dernier moyen de cognoistre est le parfaict : il n'est rien de plus solide, de plus ferme ny de plus certain, en luy consiste la tres-accomplie & entiere science. Au reste elle ne peut estre qu'en un seul homme & incommunicable, car nul autre ne peut *veoir*[+8] ce qui se faict autour de *moy* comme *moy-mesme* : & *je* puis appercevoir par experience ce qui se faict en autruy & hors de *moy*, mais non pas le sentir ou l'appercevoir si manifestement que ce qui se faict en *moy-mesme*. (f°s 215 r°–216 r°)

〔スポンの [...] の箇所をモンテーニュは省略〕

Ⓢ Et quanto plus operabitur deus circa ipsum singulariter. tanto majorem acquiret de deo notitiam per experientiam. (p. 240)	Ⓜ Plus il agira particulierement en *moy*, plus auray-je de science de luy par experience : (f° 216 r°)
Ⓢ Et hoc est vere cognoscere deum. *sentire*+9 opera sua circa seipsum per experientiam. Item magis *sentit*+10 homo per experientiam opera quae deus operatur circa animam quam circa corpus. quia anima quae cognoscit magis est propinqua sibiipsi quam corpus. (*ibid.*)	Ⓜ C'est vrayement cognoistre Dieu que de *sentir* & *veoir*+9 par experience les operations qu'il faict en *moy*. En outre l'homme *voit*+10 & *s'apperçoit* mieux de celles qu'il produict autour de son ame, qu'autour de son corps : car l'ame à qui appartient l'intelligence cognoist mieux ce qui luy est le plus proche & le plus voisin : (f° 216 v°)

voir の2～8は，同語反復を避けるという彼の『自然神学』翻訳の一般的傾向に明らかに反する。しかも，スボンが他の語と videre を並べて使用した場合，モンテーニュは videre の訳を省くことが多いのに，2＝2，7＝4，10＝7ではそうしていない。のみならず videre がない所でも，«percipere» と «sentire» を «veoir»（＋8），«sentire» を «sentir et veoir»（＋9），«sentit» を «voit & s'apperçoit»（＋10）と訳している。「見る」という「視覚」の要素が積極的に重んじられている。さらに，原文にはない「私」の使用がわれわれの注意を引く。これはこの翻訳の中では少ないことだ。それが，一個の人間が自分自身に「見る」経験による認識，自己の「外に見る」か「内に見る」かという峻別，「内に見る」ことによる認識の確かさを述べる箇所なのである。『エセー』における「私の内を見る」という概念と表現が既にここに見出されはしないだろうか。無論，彼がそこに「見る」ものは本来の人間でも神の御業でも（«incommunicable» でも）ない，現在の自己なのだが。

では，やはり『エセー』とは目的が異なるが，現状における人間の自己認識の開始を告げる第223章はどうだろう。まず，«*videamus* quid facit. utrum suum proprium factum seu facere concordet cum suo proprio debito. vel discordet...» (S., p. 296) の訳は，«*voyon* à present ce que nous faisons, *voyon* si nostre faire s'accorde avec nostre devoir, ou s'il en discorde...» (M., f° 268 v°) となる。上記の第2章と

同様の voir の反復だが，この後も短い区切りが幾つも連続し，勢いのある文になっている。それが章の後半にも生じる。

Ⓢ Igitur nunc profunde *intremus in ipsum hominem* et *perscrutemur* interiora ejus et *palpemus* viscera ejus. et *videamus* suum factum et suum facere. Usque enim modo non *tetigimus* hominem nisi superficialiter et in generali ostendendo suum proprium debitum. nunc autem *tangemus* ipsum in visceribus et in profundo et in particulari *tangendo* proprium factum (p. 296) ⇒ Ⓜ C'est à ceste heure qu'il faut *penetrer au dedans de luy*, *sonder* ses moëlles, & l'esprouver *bien avant jusques aux plus creuses*, & plus occultes parties de ses membres, *touchant* en bon escient & au vif son propre faict & action particuliere. (f° 269 r°-v°)

ここでは videre は esprouver に痕跡を残すが，文章の勢いと相俟って，進入・探査・触診の身体的比喩の優勢が増し，全体を覆っている。これが第224章の訳文を起動させる。

Ⓢ Debet ergo omnis homo *videre et comparare* totum suum factum et suum facere et suas inclinationes et quicquid sentit in seipso ad suum proprium debitum et propriam legem. (p. 297) ⇒ Ⓜ Parquoy que chascun *se taste* & *se sonde soy-mesme*, que chacun *regarde* tout ce qu'il sent en soy, son faire & ses inclinations les comparant à son devoir & loy de sa nature, (f° 270 r°-v°)

前章と同様の探査・触診の比喩が代名動詞と再帰代名詞強勢形を重ねた形で «videre et comparare» に取って代わり，かつ例外的に regarder が使われている（videre が regarder で訳されるのは，ここと第24章の２回である）。自己の注視，念入りな省察，視覚に連動する運動，身体的比喩，文章の息遣い。『エセー』の次の文章を髣髴させないだろうか。「私は，私の内を見る。私は私にしか関心を持たない，絶えず私を考察する，私を観察する，私を吟味する。他の人々は，彼らがよく考えてみるなら，常に他所へ行っているのだ。彼らは常に前へ行く。私は，私の中を転がる」«moy ie regarde dedans moy. Ie n'ay affaire qu'a moy, ie me considere sans cesse, ie me conterrolle, ie me gouste. Les autres vont tousiours ailleurs s'ilz y pensent bien : ilz vont tousiours auant, moy ie me roulle en moy mesmes.» (*E.*, II, 17, pp. 467-468/pp. 657-658)。自己を注視し，

自己の内に入り込み，そこで自己を入念に調べるモンテーニュ，その原型が翻訳に見出されるのではないか。

結

モンテーニュはスボンの認識論と証明法に関わる「視覚」的要素を大いに尊重した。殊に，学問の権威や理論ではなく「自分の経験によって自分が見ること」による認識法は，彼自身のものにまでなっている。また，神の認識と自己認識に関しては，スボンよりも明確な弁別をし，普遍的人間としての自己から，個としての自己，「私」への転換の兆候さえ伺える。遅くともこの翻訳を仕上げた段階で，「見ること」への意識とその概念は，後の『エセー』に認められるものにかなり近い程度まで形成されていたと考えてよいだろう。もしも翻訳以前にこれがなされていなかったのであれば，それはスボンの影響というよりも，『自然神学』翻訳という体験が生じさせた，あるいは促進したのではないか。いずれにせよ，将来『エセー』として出版されることになる文章が書き始められる以前に，「見ること」による認識と「自己の内を見ること」の意義は充分認識されていたのではないか。

翻訳に添えた父親宛の献辞でモンテーニュは述べている。「私は，スペインのこの偉大な神学者にして哲学者であるレーモン・スボンに，フランス風の衣装をこの手で仕立て，着替えさせました。そして，あなたが最初にご覧になった，あの粗野な装いと野蛮な物腰を剥ぎ取りました。私の考えますところ，今や彼は立派な人々のお目通りに適う様子と作法を充分身につけております」(M., A Monseigneur, 頁番号なし)。作品を著者と同一視し，人物の姿で作品を紹介するという発想は，『エセー』の「読者へ」における自画像の提示と共通する。これは単なる言葉の綾とは見なし難い。意味深いものに思われる。

本稿では voir を中心に考察したが，contempler や regarder に関しても興味深い事柄が観察できる。また，『エセー』における「視覚」に関わる語彙による言説との比較も詳細におこなう必要がある。そして，『自然神学』との決定的な違い，今の，個としての「私」の自己認識の問題も残されたままである。これらは機会を改めて論ずることになるだろう。

註

1）この他 I, 26, p. 190/p. 148 ; II, 8, p. 67/p. 386 ; II, 37, pp. 646-648/p. 783。*Essais*（略号*E.*）の引用は1580年版（CD-ROM *Le Corpus Montaigne*, éd. par Claude Blum, Champion, 1998）により，/の後 Villey-Saulnier 版（P. U. F., 1965）の頁を併記する。なお引用文中のイタリックは引用者（以下同じ）。

2）拙論「モンテーニュ，見上げる目，見下ろす目」(1)，『広島大学文学部紀要』第55巻，1995，pp. 138-158 及び(2)，『広島大学文学部紀要』第56巻，1996，pp. 269-289 を参照されたい。

3）Joseph Coppin, *Montaigne, traducteur de Raymond Sebon*, Lille, H. Morel, 1925 ; pp. 65-79 ; Philip Hendrick, *Montaigne et Sebon, l'art de la traduction*, Champion, 1996, p. 49.

4）Jaume De Puig, *Les Sources de la pensée philosophique de Raimond Sebond*, Champion, 1994, p. 79 の区分に従い，筆者が(2)の下位区分を加えた。

5）*Theologia naturalis* (Deventer, 1485)（略号 S.）とモンテーニュ訳 *Théologie naturelle* (Gourbin, 1569)（略号M.）の引用，及び語彙検索は上記註 1）の CD-ROM による。

6）Coppin, *op. cit.* pp. 81-84 ; Hendrick, *op. cit.* p. 88.

7）vidimus, visum est, visa est, visis 計15及び videamus, videnda est/sunt, videndae sunt 計42の voir への訳は 4 及び16，voir 以外への訳又は省略は11及び26である。

8）cognoscere（＋α）＋videre の訳に voir があるのは 6 箇所，ないのは27箇所である。

9）avoir, connaître, être caché, supporter, regarder それぞれ 1 回，contempler 2 回，contempler の代動詞 faire 1 回。

10）拙論「『エセー』第 1 巻第32章と第34章における「運命」と神意の解釈の問題」，『広島大学文学部紀要』第60巻，2000，pp. 257-281 及び「モンテーニュ，見上げる目，見下ろす目(4)―『エセー』における「見る」行為と斥けられた「見上げる目」の対照性―」，『広島大学大学院文学研究科論集』第61巻，2001，pp. 137-155 を参照されたい。

11）Hendrick, *op. cit.*, pp. 63-66 は翻訳の域を越える代表的な章の一つとして論じている。